

【研修報告】

北欧における高齢者のライフ・クオリティーと環境要因

兼 安 久 恵*

はじめに

日本の高齢社会は、多様な形で問題を生じている。中でも寝たきり高齢者の介護の問題は深刻である。寝たきりという言葉は、日本独特の役所用語、日常語だという(大熊, 1999, p.11)。寝たきり高齢者を多く生み出す日本の風土の中には様々な因子が幅轆している。

「寝たきり老人」のいる国いない国になるかは、介護の質と量が充実している社会か、それに問題がある社会かによって違ってくる。デンマーク、スウェーデンは、その介護の量と質が充実している社会の上位に位置づけられている(大熊, 1999, p.62)。日本の場合、高齢者対策は途についたばかりで、寝たきり高齢者の数からみても後進国である。

日本の現状は、高齢社会の直面するさまざまな問題に対応する社会政策の遅れに相まって、人々の考えの中に老いること、高齢者人口が増えることを否定的に捉えてしまう傾向さえ認められる。

老いは余生ではなく、紛れもなく己自身の人生そのものであり、できる限り自立して、生きがいを持ちながら生き果せるという肯定的認識が基盤として必要である。もしそれが望めない場合でも、人としての尊厳を保持するライフ・クオリティー(人生の質)を十分に配慮した支援を受けたい。このような高齢者の生き方、政策、ヒューマンケアリングへの関心事は、高齢者の桃源郷を想像する福祉の先進地である北欧の高齢者事情の見聞から高齢者のライフ・クオリティーについて何らかのヒントを得たくて8日間の研修に参加した。

北欧における高齢者のライフ・クオリティーと環境

日本の介護保険制度には、デンマークの仕組みや

知恵が取り入れられている。北欧事情に詳しい大熊は、真の長寿社会への段階を「すべての人が輝くことができる社会」に最も近い国としてデンマーク、次いでスウェーデンを位置づけている。

デンマークでは所得に関係なく、当然の権利としてホームヘルパーによる24時間体制で、必要度に応じて介護や介助を受けながら在宅で生活できるシステムが確立している。実際にヘルパーの支援を受けている一人住まいの婦人宅を訪問した。その婦人は脊椎の手術を受けてリハビリ中である。ヘルパーの介助は受けているが、環境も本人も明るく生活を楽しんでいる雰囲気がある。自分でできる家事は自分で行い、自慢の高低の調節ができる作業台や自分で購入したというベッドを見せていただく。それらは機能的でシンプルである。玄関の段差があるため外に出にくいので自分で市に交渉中であること、それも息子が市役所に勤めているが、それには頼らないと誇らしげに話された。一人住まいで最も安心感があるのは、安全アラームを持っていることである。一つは携帯用で腕時計タイプとペンダントタイプがあり、婦人が所持されていたのはペンダントタイプであった。もう一つは住宅内の一番手の届きやすい所に、取り付けられている固定タイプである。このアラームは在宅支援センターに繋がれていて、1日24時間いつでも緊急の助けを求めることができるようになってきている。

デンマークでは、在宅ケアを中心にして介護・医療・住宅を包括的に提供する政策がとられている。スウェーデンの特徴は、「エーデル改革」にもとづく「住まいの保証」である。日本は、医療へのアクセスはよいが介護は地獄といわれ、北欧との格差は大きい。

北欧における高齢障害者対策の素地として、ノーマライゼーションの思想がある。ノーマライゼーションの思想はデンマークで生まれた。その思想が

* 日本赤十字広島看護大学 kaneyasu@jrchn.ac.jp

デンマークの法律に盛り込まれて、今年(2001年)で42年経過している。

ノーマライゼーションは、障害や病気がどんなに重くても、年をとっても死が迫っていても、人間は「普通の生活」を送る「権利」がある、社会にはそれを支える「責任」があるという思想である。普通の生活を測る物差しとして「8つの原理」がベント・ニーリエ氏によってまとめられ、1981年の国際障害者年のキーワードとして世界中に広がった。普通の生活の第一は一日の普通のリズムである。第二は一週間の、第三は一年の普通のリズム、第四は一生の普通の経験、第五は男女両性の世界での生活、第六、第七はその社会での、当たりまえの収入と住環境の水準で暮らすこと、第八は自己決定と尊厳の確保をあげている。1998年秋、初来日したニーリエ氏は、日本の現実を「北欧の40年前、米国の30年前」といっている。

北欧の高齢者のライフ・クオリティーは、ノーマライゼーションの思想、それに支えられた政策、エーデル改革を基盤とした福祉の保証にある。それは「普通の生活」への配慮と居心地の良さへの徹底した配慮である。

デンマークにおける高齢者ケアの政策 (Policy)

デンマークにおける高齢者ケアの政策には、1) 意志の尊重、2) 予防的方略、3) その人が住んでいる家で、4) サービスの組織的提供があり、これらは北欧において人々の生活の中に定着している行政の哲学と言える。具体的にどのようにすすめているかは以下のようなものである。

- ①70歳になると市から手紙を出す。
- ②市から医師・看護婦・ヘルパー三人のチームで家庭訪問をする。
- ③環境(住居状況)・健康状態など調べる。本人が精神的・肉体的に満足した生活ができているかの調査である。
- ④小規模の住宅改造(例えば、二階建て住居の階段に両側に手すりをつける、シャワー室を設置する)を無料で行うことが告げられる。ちなみに改造費は約500クローネ程度であるが、一日入院すると約5,000クローネが必要で、十分の一の費用で入院を避けることができる。
- ⑤サービスの必要度が判断され、市が組織的にサービスを決定する。
- ⑥その人がすんでいる家で、その人の生活のリズ

ムが崩れないように配慮し、24時間在宅支援サービスは行われる。

⑦個人でサービスの拒否はできる。

このように自己決定権・人生の継続性を尊重した在宅重視、「自立支援で社会の支出は減る」と言う根拠で自立のための支援は惜しまないという行政哲学で支えられている。これに比べ日本では、「福祉の充実が経済の足を引っ張る」と言う考えが払拭されないまま、自助努力の推進を根拠に家族・ボランティアの無給労働を当てにした在宅ケアという日本型福祉は、家族介護者への負担を招き、一部には虐待や自殺等悲惨な現実がある。また自己決定権の重視は認識され始めているが、実際は家族や介護者が取り決めるケースが目立つ。

エーデル改革

92年1月1日から、スウェーデンでは旧制度を全面的に改革した新しい老人障害者福祉医療制度が発足し、これをエーデル(ADEL)改革と呼んでいる。

この改革は老人障害者福祉医療の経済的な責任を大幅に県から市に移したものである。その中でうたっている重要な事の一つに、市は老人障害者に「それを必要としている人には適切な住居を用意する義務を負う」というものがある。

〈適切で良好な住居を提供する〉ことがスウェーデンにおける老人障害者福祉の一番の基礎となっている。これは、病院で治療は終えたものの、退院後に在宅で暮らすことは不可能な人や、老齢や障害によって在宅が無理になってきた人に〈特別な住居〉を用意することなどを指す。〈特別な住居〉とはサービスハウス、グループホーム、ナーシングホーム、老人ホーム、医療ホーム、シニア住宅、(在宅介護疲労軽減)支援住宅、交換型医療住宅などの多機能多種の住まいである。市はこのような施設内の住居を勧める時は、個人の意志(希望)を尊重し、人間の尊厳を大切に環境づくりを義務づけられている。例えば、施設は基本的に個室であり、私物の持ち込みも自由となっている("Boendeformer")。

近年スウェーデンにおいて、在宅支援センターの仕事が非常に増えているが、それは一つには以前なら施設に入っていた様な高齢者や障害者が、今日では自宅で住み続けられているケースが多いからだと言われている。さらに、市は、〈特別な住居〉を必要とする老人障害者の退院時にその用意ができず、老人障害者が退院できないと、その入院費を支払う義務も負っている。

このようなエーデル改革がなされた背景には、二つの大きな理由がある。その一つは高齢化である。特に80才以上の超高齢者が大巾に増加すると予測されていて、西暦2000年には国民総人口の18%、2005年には20%に達すると言われている。超高齢者の増加に従って、病気や高齢疾患が多くなる。ひいてはその医療費は莫大なものになり、その為の対策が急がれてきた。ちなみにスウェーデンの全医療費の中に占める老人の為の医療費は、1970年の40%から1990年の60%に増加している。この数字がますます上昇すると予測されている。日本の場合、国民医療費に占める老人の医療費は1999年度が約37.0%である(厚生省、1999)。これから推測してもスウェーデンの老人医療費は高率である。

もう一つは、県と市が行う老人障害者の医療と福祉の責任の境界をはっきりさせようとのことからである。エーデル改革以降は、老人障害者の福祉医療の経済的な責任を市が単独で負うことになった。県は、保健、病気の診察や治療、など医療関係の全面的な責任を持っており、国民に平等な保健医療を与えるのが責務となっている。

しかしエーデル改革後、市は、老人障害者の為の〈特別な住居〉に入居しているお年寄りたちの保健、医療も、ある範囲内で責任を負うことになった。各市には必ず看護婦が雇われていて、その為の任務に当たっている。

エーデル改革では、福祉の基本をあくまでも、在宅介護にしている。その理由は、ライフ・クオリティーを考えたとき、自宅での生活が施設のそれに比べてはるかに優っているからである。また、高齢になってからの転居は、本人に与えるショックが大変大きい。更に自宅の方が施設住居より、はるかに経済的でもある。そのような意味で、老後介護が必要になっても出来るかぎり長く、自宅生活が続けられるように市は在宅支援センターを通じて多くの援助を送りこんでいる。しかし、それにも限界がきて最後には上記のような幾つかの住居の一つに移ることになる。

その時、本人への介護の質や量がよく検討され、移転後の先(将来)を見越した住居選びが行われている。

フォルム市(デンマーク)における ナーシングホーム

フォルム市の特徴は、森と湖に隣接する緑のオアシスと表現されているように環境がよい。デンマー

クでもっとも新しい老人ケアのためのナーシングホームとセンターがあり、ヨーロッパで最先端の汚水処理場がある。また国際的ネットワークの活発なメンバーであり、世界の「A city of tomorrow」のトップ10の一つに選ばれている。両国が世界におけるIT先進国トップ10に入っているのも興味深い。

しかしながら説明によると、市民の92%以上の女性は何らかの仕事に就いており、ストレスや生活環境の変化(たばこ、酒など)により女性の平均寿命が低下している。(男:72.5歳、女:77.8歳)生活環境の変化は、1964年の農業社会から1975年フォーラムへ地下鉄・ハイウェイが走り都市社会へと変化しており、急激な人口増加が認められる。デンマークの政策の基盤も在宅介護にあるが、フォーラムでは、高齢でハンディキャップを負う人々のために、特別に設計された105の最先端のフラット(a part of a house)をつくり、1998年中に段階的に移動した。これは高齢者市民のニーズを査定した結果で作られている。

見学した新しい多目的ナーシングホームは、各フラットの広さが40㎡、それに魅力的なテラスがあり、続きに小さな庭園がある。庭園は主に違う季節を経験する目的で設計されている。居住者8人に対して公共のエリアは200㎡、全生活エリアは520㎡で、ナース2名、居住者個々の日常生活上のニーズが快適に満たされることを基本的な考えとして設計されている。各住宅集団は、全体で3住宅単位からなり24フラットで構成されている。それぞれに個人用持ち込みの家具等が置かれ、和らいだ個性的演出やおしゃれを楽しんでいる。各フラットに続く共有のダイニングルームや各フラットを連結する廊下等空間は飾り付けを含めて、家庭での普通性と快適性を十分に配慮されている。介護用品等の置き場や作業場も生活の場に溶け込んでいて、スタッフにとっても働きやすい環境づくりがされていた。各フラットのつながりには、リハビリテーション・デイケアセンター・美容院・足の治療・歯の治療・晩餐会を行うためなどに必要とする多くの機能を提供する活動センターがあり、日常的活動を維持するよう造られている。

おわりに(まとめ)

高齢者事情の見聞から日本と北欧を比較すると、根本的な相違は、高齢者福祉についての思想や考え方の素地の違いが際立っている。高齢者の尊重、高齢者政策などこれらすべては「普通の生活がその人

のリズムで普通にできる」在宅生活がライフ・クオリティーのベストとする考え方が根拠になっている。エーデル改革で高齢者福祉の基盤が快適な住居の保証におかれたこと、できるだけ自宅で生活できるような支援が惜しみなくされていること、また特別なホームで生活する人に対しては日常的活動が継続できるように組織的に配慮されていること、また高い税金に支えられているとはいえ、小遣いの保証までされている経済的な安定は、高齢者のライフ・クオリティーの重要な環境要因である。これらの環境要因に加えて、高齢者自身の生き方として自立心が強いこと、外に出て生きかえるという生活習慣が介護の質と量と相まって寝たきりをつくらない国、そして高齢者のライフ・クオリティーを高め維持しているとまとめられる。

日本が「すべての人が輝いて生きる」真の長寿社会に近づくために、今後の課題は、

- ①ノーマライゼーションの社会的定着：在宅、施設を問わず「普通の生活がその人の普通のリズムで普通にできる」配慮
- ②高齢障害者に快適な居場所の保証
- ③高齢者自身の自立した生き方
- ④外に出て生きかえる生活習慣と環境づくり
- ⑤経済的安定、である。

謝 辞

北欧の高齢者事情を見聞する機会を与えてくださった本大学に感謝する。

文 献

厚生省 (1999). 平成11年度版厚生白書 (pp.437).

東京, ぎょうせい.

大熊由紀子(1999). 寝たきり老人のいる国いない国.

出版場所, ぶどう社.

The city of stockholm's executive office city hall. Boendeformer (福祉と住まい). Stockholm.